

仙台市の高校生 25 名がベラルーシ共和国ミンスク市を訪問しました (国際姉妹都市ミンスク市からの被災地支援プロジェクト)

2011 年9月

仙台市市民局市民協働推進部交流政策課

仙台市は、国際姉妹都市ベラルーシ共和国ミンスク市からの招待により、2011 年8月1日から10日までの10日間、高校生25名を派遣しました。「森と湖のまち・ミンスク青少年訪問団ありがとうツアー」と題したこのツアーは、仙台市が東日本大震災で被災したことを受け、ミンスク市から支援の申し出をいただいたことにより実現しました。今回は、ツアー実施に至るまでの経緯や、ミンスク市で特に印象的だった2つのトピックスをご紹介します。

1. 実施に至るまでの経緯

ミンスク市から最初にこのお話をいただいたのは、東日本大震災直後の3月下旬のことでした。当時、仙台市役所全体は、目まぐるしい震災対応業務に追われていました。私達の部署も例外ではなく、当初今夏の実施は無理だろうと絶望視されていました。しかし、ミンスク市からの「震災で傷ついた子ども達を支援したい。私達の街を訪れて、元気になってほしい」という温かい思いを受けて、実施に踏み切ることとなりました。このツアーに際し、ミンスク市は、現地滞在費のみならず、航空費や国内旅費も支援してくださいました。

限られた準備時間の中、募集期間として確保できたのは、わずか2週間。定員に達する応募が集まるのか心配していましたが、結果として190名を超える申し込みがありました。その後、選考により25名の派遣団員を決定。3回の事前研修を通じて、両市の交流の歩みやロシア語の挨拶などを勉強しました。そして、期待と不安を胸に出発の日を迎えました。

2. ミンスク市にて

(1) ミンスク市役所表敬訪問

ミンスク市では、各訪問先で、盛大な歓迎と温かいおもてなしを受けました。8月3日にミンスク市役所を表敬訪問した際にも、ミンスク市のラドゥツカ市長をはじめ、たくさんの人々が日本の国旗を振って歓迎してくださいました。また、在ベラルーシ日本国大使館の松崎臨時代理大使も表敬の席に駆けつけてくださいました。

ラドゥツカ市長からは、「ミンスク市も戦争によって多くの命が失われる辛い経験をしました。街への愛情溢れる市民がいる限り、仙台市はきっと立ち直ることができると思います」と力強い激励の言葉をいただき



模型を前に街づくりの展望を語るラドゥツカ市長(中央)

ました。その後、訪問団側を代表して宮城・ベラルーシ協会の佐藤理事が「震災により家も家族も大変な状況になりましたが、今回ミンスク市へ来ることができてよかったです。大切な友人に出会えたことをうれしく思っています」と涙を流しながら挨拶しました。ミンスク市の皆さんの優しさに触れ、被災地は決して一人ではないことを実感し、みな本当に励まされる思いでした。

(2) Day of Japan

8月6日は、滞在先のレクリエーションセンター「ロドニチョック」にて、ベラルーシの子ども達に東日本大震災による被災状況を説明したり、着物や折り紙、書道などの日本文化を紹介したりしました。また、そうめんやみそ汁などの試食、仙台七夕の紹介なども行いました。

初めて触れる日本の文化に、ベラルーシの子ども達は興味津々。書道のコーナーでは、筆を使って「仙台」「友情」などの習字に挑戦していました。この日のために準備を進めてきた日本の子ども達は、身振り手振りを交えて一生懸命説明し、交流を深めていました。



箸の使い方を教える日本の子ども達(中央)
みんなで豆つかみに挑戦



腕に漢字を書いてもらい大喜び

3. ツアーを振り返って

参加者は、ミンスク市の皆さんの温かいおもてなしに対する感謝の気持ちと、新たな友情を胸に、元気に帰仙しました。ツアー前には、「ミンスク市のことはよく知らない」と言っていた子ども達が、帰国後「大人になったらもう一度ミンスクに来たい」「最初は観光気分だったのが恥ずかしくなった」「ベラルーシの素晴らしさをたくさんの人に伝えたい」と言ってくれるようになり、顔を合わせた草の根の市民交流の力を改めて感じる事となりました。



現地の子も達と一緒に

2013年、両市は姉妹都市提携40周年を迎えます。今回のツアーは、節目の年に向け、両市の友好の絆をいっそう深める大きな一歩となりました。新たな若い担い手とともに、今回のツアーで生まれた交流の芽を大切に育てていきたいと考えています。